

NARO RESEARCH PRIZE 2020

もち性大麦品種群の育成による全国展開

もち性大麦品種育成グループ

- (次世代作物開発研究センター 麦研究領域)
- 中央農業研究センター 作物開発研究領域
- 西日本農業研究センター 畑作園芸研究領域
- 九州沖縄農業研究センター 水田作研究領域)

研究の背景等

もち性大麦は、健康機能性が消費者に認知・評価されて需要が急速に高まっており、消費量は2017年度の約2万2千トンから2019年度は約3万4千トンと拡大している。当グループでは以前から品質に優れた国産原料に対する実需者・生産者の要望に応え、継続して国内各地の気象条件や麦種に対応したもち性大麦の品種群の育成に取り組んできた。

研究の概要

2009年育成の「キラリモチ」をはじめとして、第4期には「はねうまもち」「くすもち二条」などを育成し、全国での栽培に対応できる品種群を育成した。また、近年のもち性大麦需要の拡大を受けて普及活動を加速し、生産者・実需者双方からの種苗や原料供給の要望に迅速に応えた。結果、国内産のもち性大麦生産量は2015年産の80トンから2020年産には12,625トンとなり、そのうち1万トン以上を機構育成品種が占めている。大麦の新規需要の開拓に大きく貢献した成果として高く評価される。

北海道にも展開中

寒冷地向けで高加工適性
「はねうまもち」
(2016育成,1000ha)

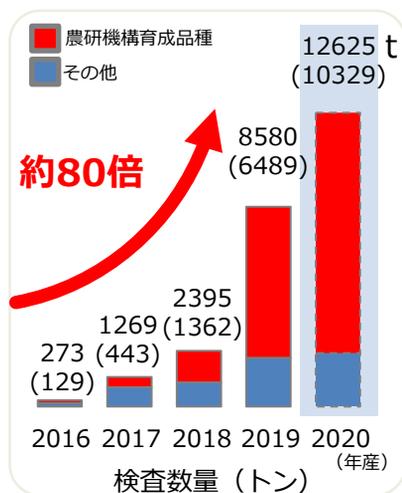
暖地向けで多収
「くすもち二条」
(2016育成,973ha)

温暖地向けで多収
「きはだもち」
(2018育成,5ha)

温暖地向けで褐変しにくい
「キラリモチ」
(2009育成,650ha)

温暖地向けで高β-グルカン含量
「ワキシーファイバー」
(2014育成,10ha)

(育成年は年度)



数値はもち性大麦全体の生産量で、
()内はうち農研機構育成品種

農研機構育成品種が生産量は
2020年産では10,000トン以上
に達する見込み